氏　　名	坂上賀奈子（サカウエカナコ）
学位の種類	博　士　（音　楽）
学位記番号	博　音　第 144 号
学位授与年月日	平成21年 3 月25日
学位論文等題目	〈論文〉エドヴァルド・グリーグ：歌曲集《山の娘》作品67の一考察 －作品分析と演奏解釈－
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学　教　授　（音楽学部）　朝倉蒼生
（副査）	〃　〃　（　〃　）　伊原直子
（〃）	〃　〃　（　〃　）　寺谷千枝子
（〃）	〃　〃　（　〃　）　中嶋敬彦

（論文内容の要旨）

本論文では、ノルウェーを代表する作曲家、エヴァルド・グリーグの歌曲集《山の娘》作品67の作品分析と、実際に演奏するための演奏解釈を考察する。

グリーグは、その生涯に多くの歌曲を残しており、歌曲というジャンルは彼の作曲家人生において非常に重要な意味を持っていた。彼は生前、歌曲のインスピレーションの源は妻のニーナにあると述べている。この言葉のとおり、彼女と出会ってから書かれた《心の旋律集》作品５をきっかけに、彼の歌曲に対する才能は開花していった。しかし、その後はニーナの力だけではなく、彼自身の音楽性が次第に成熟していったことで、彼の作曲家人生における大きな位置を占めるようになった。グリーグは歌曲において「歌曲を作曲することは詩の世界を伝えることである」という精神をモットーとしていた。そこで、筆者は彼の歌曲の魅力がこの精神に隠されているのではないかと考え、彼の歌曲作品を演奏家としてどのように捉えるべきかを考察する。また、実際に演奏することを想定し、演奏家としての視点から作品分析を行い、それに相応しい演奏解釈を導き出すことを目的とする。題材には、彼の晩年の傑作《山の娘》作品67を取り上げる。この作品は、彼の歌曲作品の中で唯一物語性のある歌曲集であり、その統一感のある音楽は独特の美しい世界を持ち、素朴ながらに深い情感に満ちあふれている。これは、彼の残した歌曲作品中でも最も秀でた作品と言えよう。詩を語らせることを第一に考えたグリーグが、その詩の世界に忠実に、またはそれ以上の魅力的な形で表現しようとした歌曲への思いを辿る。そして、彼の傑作でもある歌曲集《山の娘》に演奏家として向き合い、それを忠実に表出できる演奏法を探求する。

第一章は、この歌曲集の原点となるアーネ･ガルボルグ著、詩集『山の娘』の分析である。グリーグが手にした詩集がどのような作品であったのかを考察するために、まず作家の生涯を辿り、その人間性と作風から原作の特徴と作者が作品に込めた世界を捉える。

第二章では、原作とグリーグとの関係に焦点を当て、グリーグが作品から得た影響と、作曲に至らせた魅力に迫る。また、歌曲集の出版までに要された時間に見る、グリーグの作品への思いを考察する。

第三章は、歌曲集《山の娘》作品67の作品分析、及び演奏解釈である。これまでの章を踏まえ、楽譜に込められた作曲家の思いを忠実に捉え、演奏家としての観点から分析を行う。また、その分析に伴い、実際の演奏を想定した生きた演奏解釈を導き出す。

これらの研究の結果、本論文では《山の娘》の特質を捉え、実際の演奏を想定した演奏解釈を見出した。グリーグの歌曲作品における旋律の美しさは、詩の韻律や音節数と密接に関係しており、彼の言葉への配慮を感じ取ることができる。それはごく自然な抑揚を持つもので、決して音楽が誇張されること

なく、詩の真の意味を忠実に表出する。そして、あたかも詩と音楽が初めからひとつであったかのように思わせる。彼の作品は一見して音が少ないが、実際に音にしたときの空間的な広さには圧倒される。その選りすぐられた音によって作られた素朴な音楽だからこそ、ひとつひとつの音の余韻を感じる時間と空間が与えられている。筆者はこの音に与えられた時間と空間を「音楽の余白」と捉えた。そして、これを演奏解釈のヒントとして取り入れ、演奏家としての見解を見出した。また、詩人の意図を忠実に表現したグリーグの作品研究を通し、彼の歌曲を演奏することの意義に気づかされた。彼はその大胆なまでの素朴さで小さな歌曲に無限の世界を広げたのである。まさに、彼は詩の世界と独自の音楽とを融合させた偉大な歌曲作曲家なのである。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、「エドヴァルド・グリーグ：歌曲集《山の娘》作品67の一考察　―作品分析と演奏解釈―」と題し、グリーグの晩年の傑作、歌曲集《山の娘》の作品分析と実際に演奏する為の演奏解釈を行っている。学位申請者はまず次の点を指摘した。グリーグが「歌曲を作曲する事は詩の世界を伝える事である」としているが、特に他の作曲家と異なる特色、は「彼の作品は一見して音が少なく、単純に見える物が多い。しかし実際に音にしてみるとその圧倒的な空間の広さに驚かされる。彼の素晴らしさはここにある。」としている。グリーグは詩の世界を再現する為に選び抜いた最小限の音でその精神を表出し、ひとつひとつの音からの余韻が曲の世界を構成する要素の一つになっている。それによって聴く人には無限の空間を与え、演奏する者には音自体が持つ色や感触を味わう時間と自由が与えられる。申請者はこの時間と自由を「音楽の余白」として捉えている。彼が求めた音楽とは充実した素朴さであり、余分な音をそぎ落とし、必要な音だけが抽出されて生まれた音楽は極めて清らかであり、聴く人の心の最も深いところに届くと述べている。これらは申請者が演奏して感得した実感であり、他の演奏家に寄与するところが大きい。

演奏所見：
Edvard Griegの作品から
Ⅰ　ヴィルヘルム・クラーグの５つの詩　Op.60　全５曲
Ⅱ　ホルガー・ドラクマンの６つの詩　Op.49より２曲
Ⅲ　《ペール・ギュント》Op.23より　　ソルヴェイグのうた
　ヘンリク・イプセンの６つの詩　Op.25より　　２白鳥　　４睡蓮に
　６つの歌　Op.48より（ドイツ語による）　　４秘密を守るナイチンゲール　　６夢
Ⅳ　アーネ・ガルボルグの詩集による歌曲集　《山の娘》Op.67　全８曲　が演奏された。
グリーグの素朴で自然な音楽が美しく伸びやかに歌われた。なめらかな暖かい声で美しい旋律線を描き、僅かな言葉の不明瞭さや音程の乱れも十分に補う心地よい演奏となった。「白鳥」では音の余白がいかされ、心に深くひびく歌唱であった。歌曲集《山の娘》は十分歌い込まれており、論文での分析に裏打ちされた納得できる演奏であった。
以上、総合して博士の学位を授与するに十分と認め合格とする。